

# 大谷學報 第十九卷 第二號

## 龍樹大士の宣顯し給ひし摩訶衍の宗要

加藤智學

155

龍樹大士の弘興し給ひし宗教は、摩訶衍(Mahayana 大乘)即ち菩薩(Bodhisattva)所乗の大道なり。菩薩大乘は、舍羅婆迦(Śrāvaka 聲聞)・辟支佛(Pratyekabuddha 獨覺・緣覺)の二乗に超勝す。されば、菩提薩埵(Bodhisattva 覺有情)は、聲聞・獨覺の下劣乗を棄て、甚深の般若(Prajñā 智慧)を學し、諸の波羅蜜(Paramitā 到彼岸の清淨なる行)を修し、利他大悲を行じて、阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-sambodhi 無上正等正覺)を圓成せんと欲す。是れ即ち摩訶衍(大乘)なり。『十二門論』の「觀因緣門」には、此の摩訶衍の意義を解釋して曰はく。「摩訶衍とは、二乗よりも上たるが故に、大乘と名づく。諸佛は最大にして是の乘にて能く至れるが故に、名づけて大と爲す。諸佛大人、此の乘に乗するが故に、故に名づけて大と爲す。又能く衆生の大苦を滅除し、大利益の事を與ふるが故に、名づけて大と爲す。又觀世音(Avalokiteśvara)得大勢(Mahāsthāmaprāpta)文殊師利(Mañjuśrī)彌勒菩薩(Maitreya-bodhisattva)等の是の諸

龍樹大士の宣顯し給ひし摩訶衍の宗要(加藤)

の居士の所乘なるが故に、故に名づけて大と爲す。又此の乘は能く一切諸法の邊底を盡くすを以ての故に、名づけて大と爲す。又『般若經』の中に佛自ら説きたまふが如し、摩訶衍の義は無量無邊なりと。是の因縁を以ての故に、名づけて大と爲す。」かくて、聲聞乘・辟支佛乘は、小乘(Hinayana)なり下劣乘なりと貶せられて、大人所乗の菩薩大乘は高唱せられたりき。

## 二

釋尊所説の一趣道(Ekayana)は、展開して三乘を分別するに至り、滅後の部執、聲聞乘を宣顯し、大機漸く發動して菩薩大乘を唱道す。佛滅後三四百年の頃より六七百年の頃までに、幾多の菩薩(Podhisattva)摩訶薩(Mahasattva)世に出づるあり、摩訶衍の大義を開顯したりき。されば、龍樹居士の出世までには、既に多數の大乘經典の誦出せられたるものありき。『大智度論』四十六の「摩訶衍品」の釋には「説く所の種々の法とは、所謂『本起經』『斷一切衆生疑經』『華手經』『法華經』『雲經』『大雲經』『法雲經』『彌勒問經』『六波羅蜜經』『摩訶般若波羅蜜經』なり。是くの如き等の無量無邊阿僧祇の經は、或は佛の説、或は化佛の説、或は大菩薩の説、或は聲聞の説、或は諸の得道の天の説なり」と云へり。又『智度論』三十三にも、「廣經(Vaidya 毘佛略)とは摩訶衍に名づく。所謂『般若波羅蜜經』『六波羅蜜經』『華手經』『法華經』『佛本起因縁經』『雲經』『法雲經』『大雲經』なり。是くの如き等の無量阿僧祇の諸經は、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故に説けり」と云へり。されば此等の諸大乘經典は既に龍樹居士已前に誦傳せられつゝあり。猶ほ此等の外に、『智度論』『十住毗婆沙論』には、『阿彌陀經』(大『無量壽經』)『般若三昧經』『首楞嚴三昧經』

『不可思議解脫經』『十地經』『毗摩羅詰經』『大悲經』『如來智印經』『寶月童子所問經』等の幾多の大乗經典を引用せり。蓋し此等は當時大乘教徒の依用崇信したりし重要經典なるべく、以て佛滅後七百年已前の大乘教界の流傳を察知すべきなり。

### 三

惟ふに、菩薩大乘の宣顯には、先づ『六波羅蜜經』『般若波羅蜜經』の誦傳なかるべからず。吳の支謙(西紀三三—五三)の譯せる大『阿彌陀經』は『無量壽經』の現存諸本中の最も古き經本なるが、其中には「六波羅蜜經を奉行する」の語あり。支那に傳譯せられたる者には、此より先、後漢の中平五年(西紀一八六)に嚴佛調の翻出したる『菩薩內習六波羅蜜經』一卷あり。是れ龍樹大士と殆ど同時代に支那に傳譯せられたる經典なり。又魏吳の時代の失譯として經錄中に其の名を記傳せるもの、中にも『六波羅蜜經』一卷あり。此等は同一の經典なりや否や明ならざるも、最も早く成された大乘經典中に『六波羅蜜經』と稱せらるべき經典のありしならんを推想して可ならん。菩薩道の大乗は、檀那(Dāna)・布施・尸羅(Sīla)・持戒・羼提(Kṣānti)・忍辱・毘梨耶(Vīrya)・精進・禪那(Dhyāna)・靜慮・般若(Prajñā)・智慧の六波羅蜜(Paramitā)を修行し、一佛國より一佛國に生じて、諸佛を供養し、衆生を教化し、自利利他の功德を積累して、其の間に、先づ修行退廢せざる阿惟越致(Avaivartika)不退轉地を得て、後終に一生補處に至り、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。此の六波羅蜜は、『增一阿含』一「序品」・同十九(四法經)・等にも流入して、菩薩大乘の修行として叙說せらる。かくて大乘經典中には到る處に六波羅蜜を説き或は六波羅蜜なる言句の存するあり。

さるほどに、此の六波羅蜜の中にても主要なるものは般若波羅蜜にして、大乘の大乘たる所以は、實に其の般若の甚深なる摩訶般若波羅蜜を修得するにあるなれば、則ち其の甚深般若を宣顯すべく『摩訶般若波羅蜜經』は誦出せられざるべからざるなり。されば先づ『小品般若經』あり、而して更に其の所説を敷演したる『大品般若經』は成されたりき。此等の『般若經』には、般若波羅蜜を力説しつゝ、亦廣く六波羅蜜及び其他の諸道品を説けり。即ち『大品般若經』五「問乘品」「摩訶衍品」・同二十「六度相攝品」等の如き、六波羅蜜を叙説し、「問乘品」には、「六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり」等と告げて、薩婆若(Sarvajña 一切智)に應ずる心を以て布施・十善・等を行ひ無所得にして修行するをば檀那波羅蜜・尸羅波羅蜜・等を名つくと教示せり。斯くの如く甚深般若を修學したる無所得の心にて諸善を修行すれば、其の諸の道德は、みな波羅蜜と稱せらるゝなり。

## 四

此の六波羅蜜は、其の後『十地經』等の成さるゝや、般若波羅蜜より方便(Upayā・願(Praṇidhāna)・力(Bala)・智(Jñāna)の四波羅蜜を開きて、十波羅蜜として叙説せらるゝに至れり。かくて龍樹大士は『菩提資糧論』に此等の諸波羅蜜の行相を論説して、般若波羅蜜の最勝なるを告げ、「般若波羅蜜は、菩薩仁者の母なり、善方便を父と爲す、慈悲は以て女と爲す」<sup>いすめ</sup>、「施と戒と忍と進と定と、及び此の五の餘とは、みな智度に由るが故に、波羅蜜に攝せらる」等と示されたり。又『十住毘婆沙論』一「入初地品」には、「智度無極は母にして、善權方便は父なり、生するが故に名づけて父と爲し、養育するが故に母と名づく」、「菩薩には、善法は父、智慧を以て母と爲す、一切の諸の如來は、

みな是の二より生ず」、「般舟三昧 (Pratyupanna-samadhi 現前三昧・佛立三昧・即ち念佛三昧) は父にして、大悲無生 (大悲と無生法忍) は母なり、一切の諸の如來は、是の二法より生ず」等と説かれたりき。

六波羅蜜の行相は亦『大智度論』十一・乃至・十八に廣く論說せらる。『智度論』十八には、般若波羅蜜を解説して「諸の菩薩は、初發心より、一切種智を求め、其の中間に於て、諸法の實相を知る、慧は是れ般若波羅蜜なり」と告げ、又その諸法の實相を教示して、「佛、須菩提 (Sudhrit) に語りたまはく、若し菩薩、一切の法を觀ぜば、常に非ず、無常に非ず、苦に非ず、樂に非ず、我に非ず、無我に非ず、有に非ず、無に非ず、等、またはの觀をも作さざれ、是を菩薩の般若波羅蜜を行ずと名づく」と。是の義は、一切の觀を捨て、一切の言語を滅し、諸の心行を離れ、本より已來、不生不滅にして、涅槃 (Nirvāṇa) の相の如く、一切諸法の相も亦是くの如し、是を諸法の實相と名づく」と云へり。かくて『中論』『十二門論』は『般若』の大義に據りて諸法の實相を演述す。『中論』一「觀因緣品」には、先づ「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出、能く是の因緣を説き、善く諸の戲論を滅す、我、佛・諸説の中の第一を、稽首して禮したてまつる」と、八不中道を説き、『論』四の「四諦品」には、「諸佛は、二諦に依りて、衆生の爲に法を説きたまふ、一には世俗諦を以てし、二には第一義諦なり」、「若し俗諦に依らざれば、第一義を得ず、第一義を得ずんば、則ち涅槃を得ず」、「衆の因緣より生ずる法は、我、即ち是れ無なりと説く、亦是を假名と爲す、亦是れ中道の義なり、未だ曾て一法も因緣より生ぜざるは有らず、是の故に一切の法は是れ空ならざる者なし」と、眞俗二諦を告げて空假中の義を叙せり。『智度論』六にも亦「因緣生の法、是を空相と名づけ、また假名と名づけ、また中道と名づく」等と云へり。是れ諸法の實相を説けるなり。諸法の實相は第一義諦なり。世諦・第一義諦は、亦『十二門論』「觀性門」。

『廻諍論』等に宣顯せり。世諦に因りて第一義諦を説くことを得るなり。第一義諦・諸法の實相を了知するは般若波羅蜜にして、菩薩は、薩婆若(Sarvajñā 一切智)を求め、甚深の般若を學し、無所得の心にて諸の波羅蜜を修行す。是れ摩訶衍(大乘)の修道にして龍樹大士の宣顯し給へる大法の宗要なり。